特107
472

# 灸點圖解

成見白煙
上原八重子 共著

長壽堂發行

始

特107
472

# 序

曩に「素人灸治家庭療法」と題し小冊子を發行しましたとき同書第二章人體略圖と灸點(灸穴)に關し前面五十七ヶ所後面五十一ヶ所の重要なる灸點計百八ヶの灸穴を圖示しましたが、同書第三章諸病と灸點並びに灸壯數に約九十種の諸病患を說述しました故右前面後面の二圖面では不充分ならむと考へ十四經經絡に現はれたる灸點六百五十七穴を全部細大洩らさず各十四經に分類して圖解圖示しました恰も地理書に於ける地圖の役目をします追て由本書愈々深く研究會得致されん事を希ふ次第です

壬戌三伏夏日

著者述

大正
11. 9. 19
内交

# 目次

第一章　十四經經絡……一
第二章……三
第一圖　手の太陰肺經の圖……三
第二圖　手の陽明大腸經の圖……五
第三圖　足の陽明胃經の圖……八
第四圖　足の太陰脾經の圖……一二
第五圖　手の少陰心經の圖……一五
第六圖　手の太陽小腸經の圖……一七
第七圖　足の太陽膀胱經の圖……二〇

目次

第八圖　足の少陰腎經の圖……二五
第九圖　手の厥陰心包經の圖……二八
第十圖　手の少陽三焦經の圖……三〇
第十一圖　足の少陽膽經の圖……三三
第十二圖　足の厥陰肝經の圖……三八
第十三圖　督脈の圖……四一
第十四圖　任脈の圖……四三

終



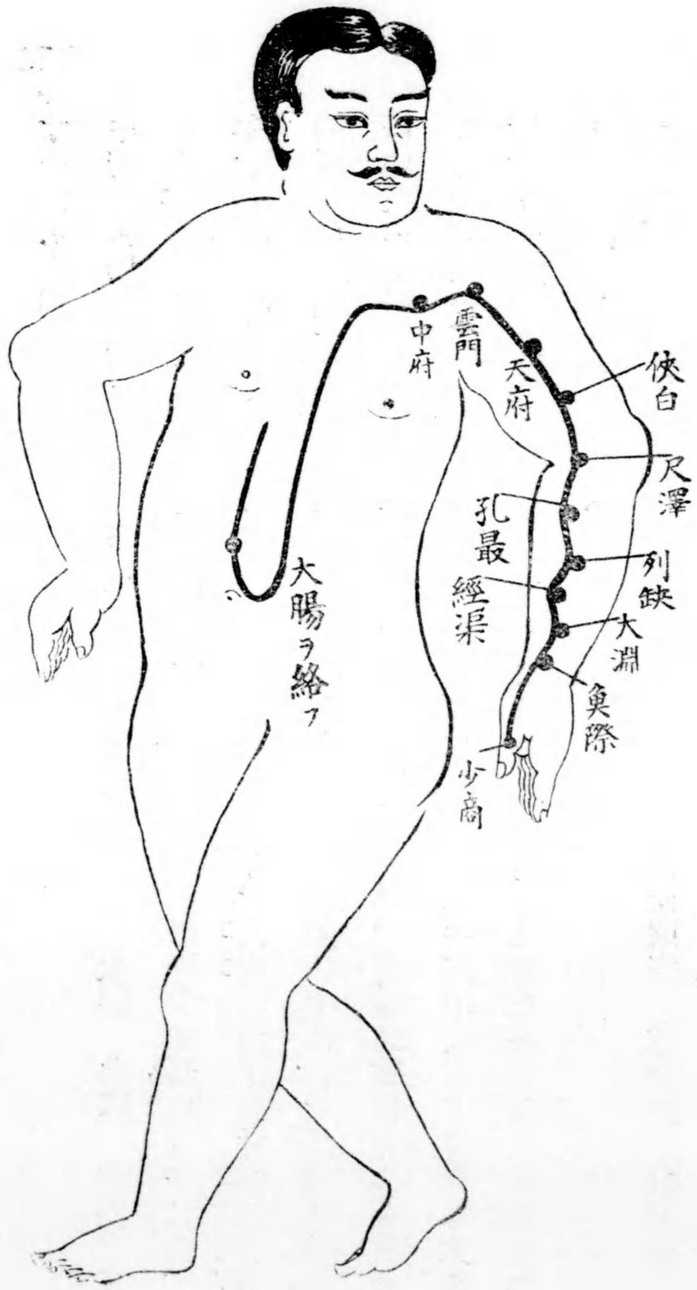
# 灸點圖解

# 第一章　十四經經絡

## 一、經絡と經穴並に人體略圖と穴所

- 手の
  - 三陰（藏ヨリ手ニ至ル）
    - 大陰　肺經　左右　十一穴づつ中焦より大指の端に至る即ち肺系より横に腋下に出づ
    - 小陰　心經　左右　九穴づつ心中より小指の端に至る即ち心系より上り腋下に出づ
    - 厥陰　心胞經　左右　九穴づつ胸中より中指の端に至る即ち胸に循り脇に出て上りて腋下に至る換言して陰の盡る所なり
  - 三陽（手ヨリ頭ニ至ル）
    - 陽明　大腸經　左右　二十穴づつ大指の次指の端より上鼻孔に至る
    - 大陽　小腸經　左右　十九穴づつ小指の頭より目の内眥に至る
    - 小陽　三進經　左右　二十三穴づゝ小指次指の端とり目の鋭眥に至る
- 十四經々絡
  - 任脈　腹を直行す
  - 督脈　脊を直行す
- 足の
  - 三陰（足ヨリ頭ニ至ル）
    - 大陰　脾經　左右　二十一穴づつ大指の端より脾に屬胃を絡と雖も復膈に上りて咽を挾み舌下に散す
    - 小陰　腎經　左右　二十七穴づつ足心より腎屬し膀胱を絡と雖も復腎より上りて舌本を挾む
    - 厥陰　肝經　左右　十三穴づつの大指の聚毛より肝に屬し膽を絡と雖も復上りて額に出て督脈と巔に會す
  - 三陽（頭ヨリ足ニ至ル）
    - 陽明　胃經　左右　四十五穴づつ鼻いり中指の中間に至る
    - 大陽　膀胱經　左右　六十三穴づつ目の内眥より小指の外側の端に至る
    - 小陽　膽經　左右　四十三穴づつ目の鋭眥より小指次指の間に至る

# 第一　手の太陰肺經の圖



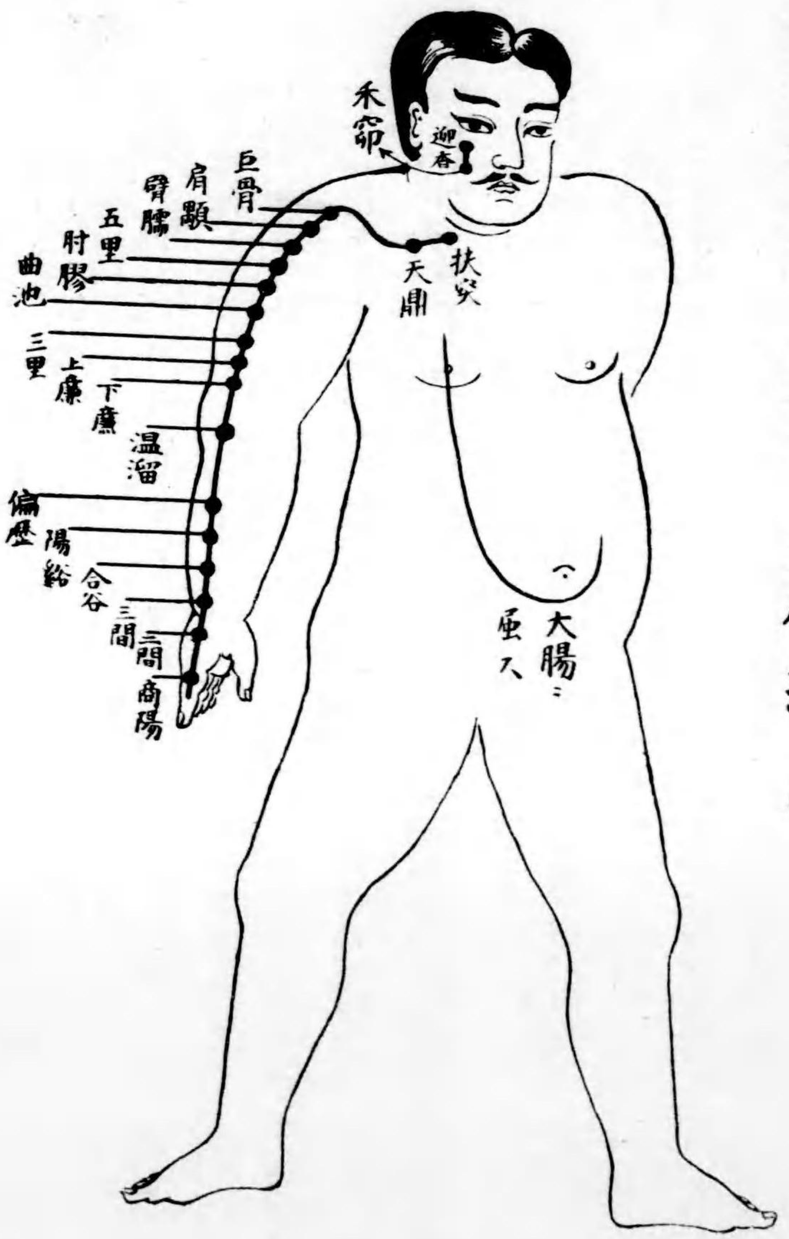
左右各十一穴あり曰く

中府　雲門　天府　俠白　尺澤　孔最　列缺　經渠　太淵　魚際　少商とす

而て中府の穴は雲門の下一寸乳の上三肋の間動脈手に應ずる陷たる中に在、雲門は巨骨の下氣戸の傍を挾み二寸陷なる中に在、天府は腋下三寸臑の內廉動脈の中に在、俠白は天府の下肘を去ること五寸動脈の中に在、尺澤は肘中の約文の上動脈の中に在、孔最は腕上を去ること七寸、列缺は腕の側の上を去ること一寸五分、經渠は寸口陷たる中に在、太淵は掌後陷中に在、魚際は大指本節の後內側散脈の中に在、少商は大指の端の內側爪甲を去ること韮葉の如白肉の內宛々たる中に在、

此系統には咳嗽　上氣　喘喝　煩心　胷滿　臑臂の內前廉痛　掌中熱　肩脊痛風寒　中風等を惹起すことあり

# 第二　手の陽明太腸經の圖



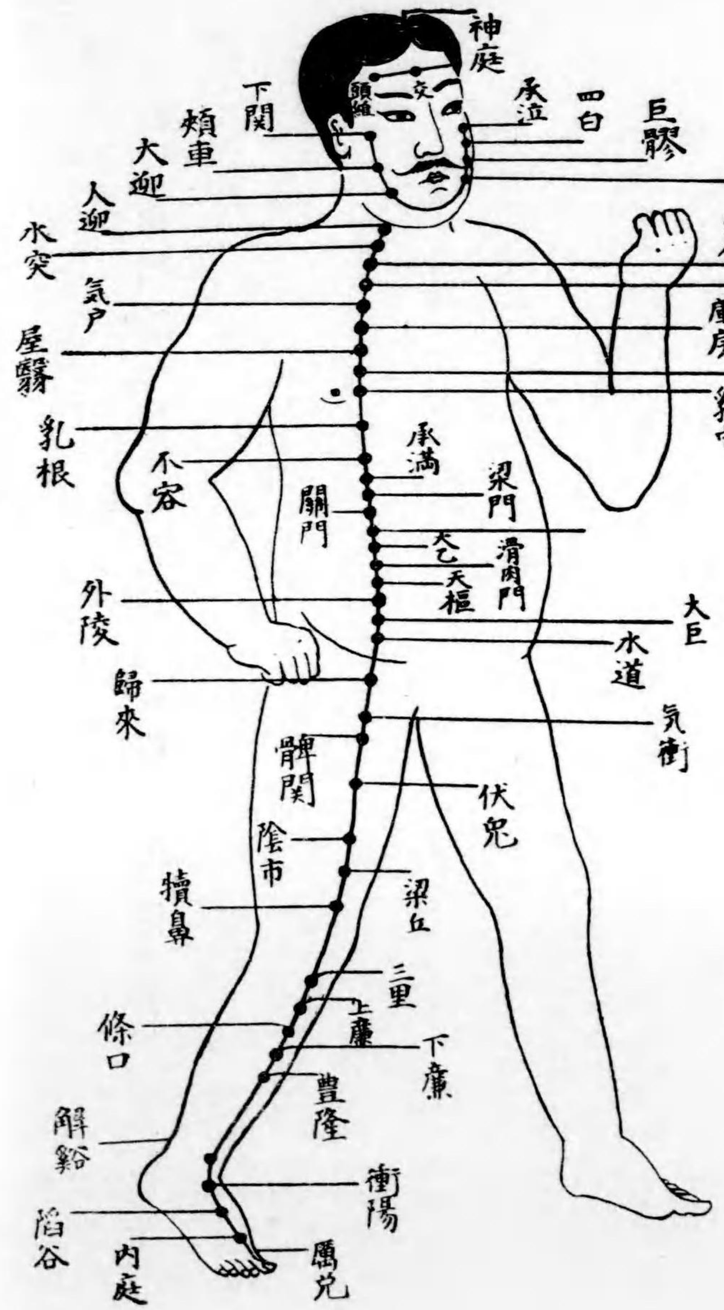
左右各二十穴あり曰く

商陽　二間　三間　合谷　陽谿　偏歴　温溜　下廉　上廉　三里　曲池　肘髎　五里　臂臑　肩髃　巨骨　天鼎　扶突禾髎　迎香とす而て商陽は手の大指次指の門側に在、爪甲を去こと韮葉の如し二間は手の大指次指の本節の前内側陷たる中に在、三間は手の大指の次指本節の後内側陷たる中に在、合谷は手の大指の次指岐骨の間陷たる中に在、陽谿は腕中の上側兩筋の間の陷たる中に在、偏歴は腕中の後三寸の處に在、温溜は腕後（小士は六寸大士は五寸に）在、下廉は輔骨の下上廉を去こと一寸の處に在、上廉は三里の下一寸の處に在、三里は曲池の下二寸之を按は肉起に在（即ち肘の上三寸）、曲池は肘外の輔骨に在、肘髎は肘の大骨の外廉の陷たる中に在、禾髎は鼻孔の下水溝の旁に挾み五分の處に在、迎香は禾髎の上一寸鼻孔五分の處に在、



此系統には齒痛、頤腫、目黄み、口乾き、齆衄、喉痺、肩前臑痛、次指痛等を惹起すことあり

# 第三　足の陽明胃經の圖




左右各四十五穴あり曰く

承泣　四白　巨髎　地倉　大迎　頰車　下關　頭維　人迎　水突　氣舍　缺盆　氣戶　庫房　屋翳　膺窓　乳中　乳根　不容　承滿　梁門　關門　大乙　滑肉門　天樞　外陵　大巨　水道　歸來　氣衝　髀關　伏兎　陰市　梁丘　犢鼻　三里　上廉　下廉　條口　豐隆　解谿　衝陽　陷谷　內庭　厲兌

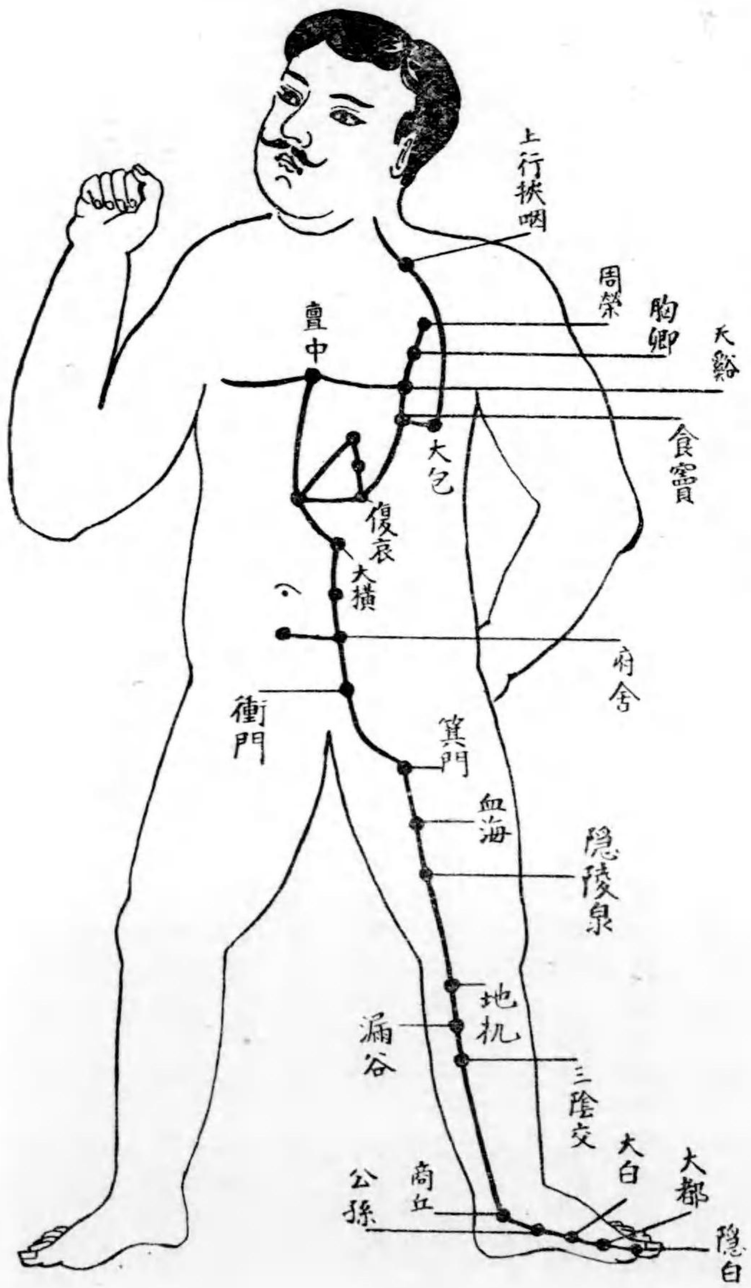
承泣は目の下七分直瞳子に在、四白は目の下一寸直瞳子に在、巨髎は鼻孔の旁八分直瞳子に在、地倉は口吻の旁ら四分を挾む處に在、大迎は曲頷の前一寸三分骨の陷中の動脈に在、頰車は耳下曲頰の端陷中に在、下關は客主人の下耳前動脈の下廉に在、頭維は額角髮際本神の旁一寸五分の處に在、(即ち神庭の旁ら四寸五分の處に在)、人迎は頸の大脈に在(動して手に應ず)、水突は頸の大筋の前直に人迎の下氣舍の上に在、氣舍は頸の直人迎の下天突を

挾て陷中に在、缺盆は肩下の横骨陷中に在、氣戸は巨骨の下兪府の旁二寸陷たる中に在、庫房は氣戸の下一寸六分陷たる中に在、屋翳に庫旁の下一寸六分陷たる中に在、膺窓は屋翳の下一寸六分陷たる中に在、乳中の穴は乳に當る乳根の穴は乳の下一寸六分陷たる中に在、不容は幽門の旁相去こと各一寸五分の處に在、承滿は不容の下一寸の處に在、梁門は承滿の下一寸の處に在關門は梁門の下一寸の處に在、大乙は關門の下一寸の處に在、滑肉門は太乙の下一寸の處に在、外陵は天樞の下一寸の處に在、大巨は外陵の下一寸の處に在、水道は大巨の下三寸の處に在、歸來は水道の下二寸の處に在、氣衝（一名氣街）は歸來の下鼠蹊の上一寸動脈手に應じ宛々たる中に在、髀關は膝上伏兎の後交文の中に在、伏兎は膝上六寸起肉に在、陰市は膝上三寸伏兎の下陷たる中に在、梁丘は膝上二寸兩筋の間に在、犢鼻は膕膝の下行骨の上骨

解大筋の中に在、三里は膝眼の下三寸衍骨の外大筋の內宛々たる中に在、巨虛の上廉は三里の下三寸の處に在、條口は下廉の上一寸の處に在、巨虛の下廉は上廉の下三寸の處に在、豐隆は外踝の上八分の處に在、解谿は衝陽の後一寸五分腕上の陷たる中に在、衝陽は足の跗上五寸骨間動脈陷谷を去こと三寸の處に在、陷谷は足の大指の次指の間本節の後の陷なる中に在、內庭は足の大指の次指の外間陷たる中に在、厲兌は足の大指の次指爪甲を去こと韭葉の如なるに在、

此系統には狂瘧、溫淫、汗出、衍衄、口喎唇、胗、頸腫、喉痺、大腹、水腫、膝腫痛、膺乳、氣街、股、伏兎、跗外廉足の跗上を循皆痛む諸病を惹起すことあ

# 第四 足の太陰脾經の圖




左右各二十一穴あり曰く

隱白　大都　大白　公孫　商丘　三陰交　漏谷　地機　陰陵　血海　箕門

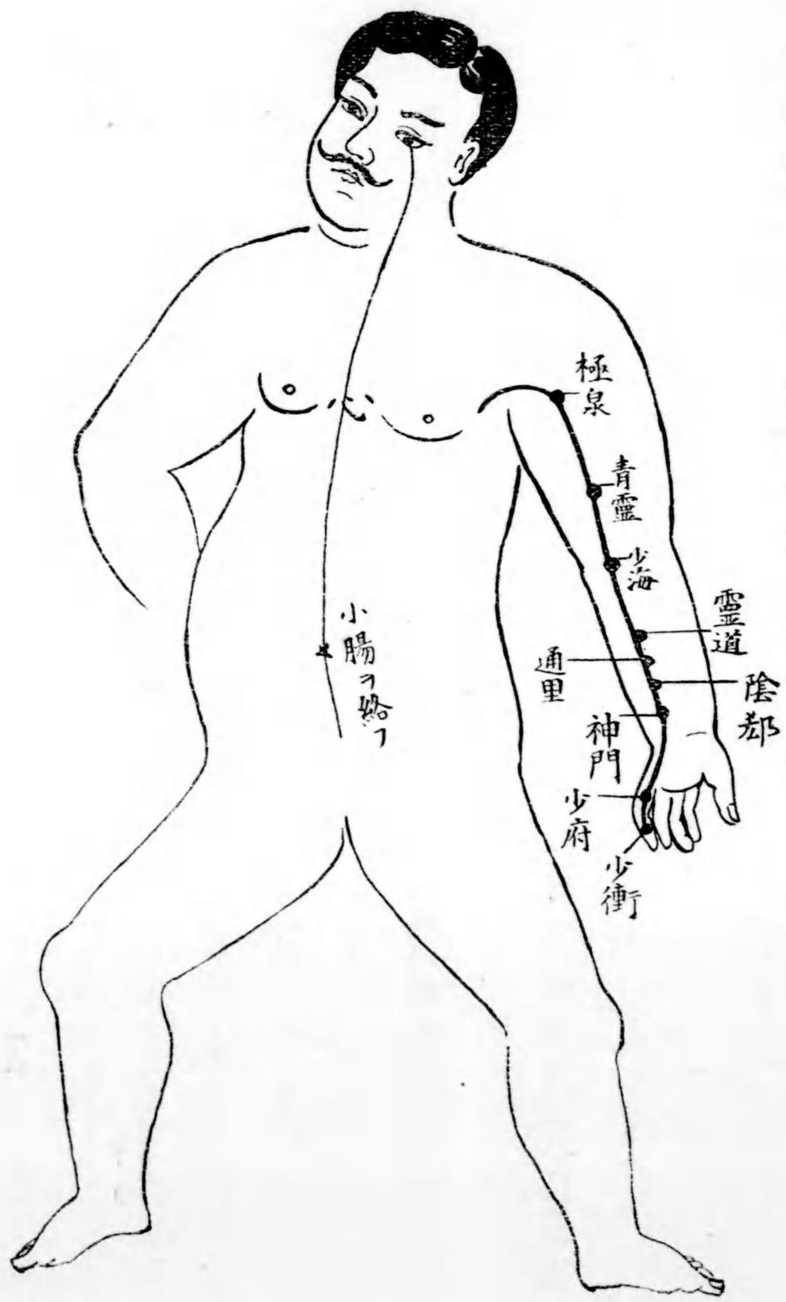
衝門　府舍　腹結　大横　腹哀　食竇　天谿　胃卿　周榮　大包とす而て隱白は足の大指の内側の端に在爪甲の角を去こと韭葉の如し、大都は足の大指に在、本節の後陷たる中に在、大白は足の内側核骨の下陷たる中に在、公孫は足の大指の本節の後一寸の處に在、商丘は足の内踝の下陷たる中に在、三陰交は内踝の上三寸陷たる中に在、漏谷は内踝の上六寸の處に在、地機は膝下五寸の處に在、陰陵泉は膝下の内側輔骨下陷成中に在、血海は膝下の上内廉白肉の際二寸の處に在、箕門は魚腹の上越筋の間陰股の内動脈の中に在、府舍は腹結の下三寸の處に在、大横は腹哀の下三寸五分直臍の處に在、食竇は天谿の下一寸六分の處に在、天谿は胃卿の下一寸六分の處に在、胃卿は周

榮の穴一寸六分陷たる中に在、周榮は中府の下一寸六分陷たる中に在、大包は淵腋の下三寸の處に在、

此系統には舌本痛、身體の動作不自由となり、食慾進まず、煩心、心下急痛、寒瘧、溏し、瘕泄水下、黄疸等の諸病を惹起すことあり



# 第五　手の少陰心經の圖

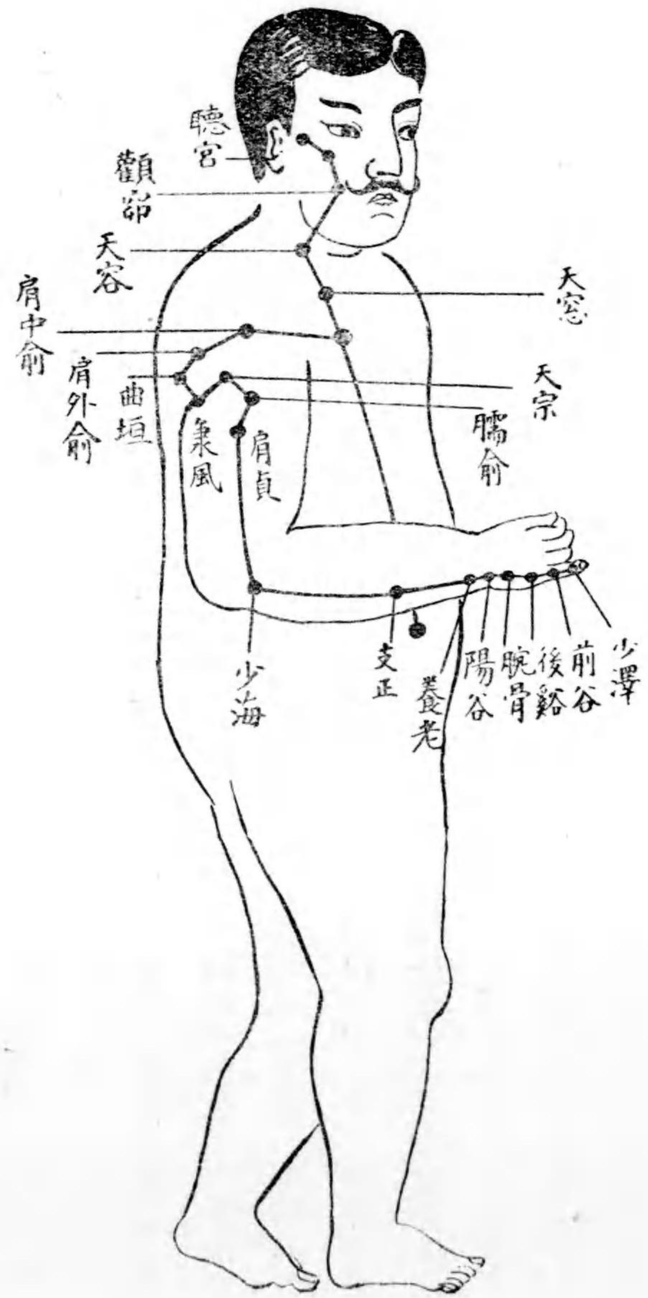


左右各九穴あり曰く

極泉　青靈　少海　靈道　通里　陰郄　神門　少府　少衝とす而て青靈は肘上三寸の處に在、少海は肘内大骨の外に在(即ち肘の端を去こと五分の處)、靈道は掌後一寸五分の處に在、通里は腕後一寸陷たる中に在、陰郄は掌後の脈中腕を去こと五分の處に在、神門は掌後鋭骨の端陷たる中に在、少府は手の小指本節の後陷たる中に在、少衝は手の小指の内廉の端に在。爪甲去こと韮葉の如し

此の系統には嗌乾、心痛、目黄み、脇痛、臑臂内の後廉痛・厥掌中熱等の病を惹起すこと多し






第六　手の太陽小腸經の圖

左右各十九穴あり曰く

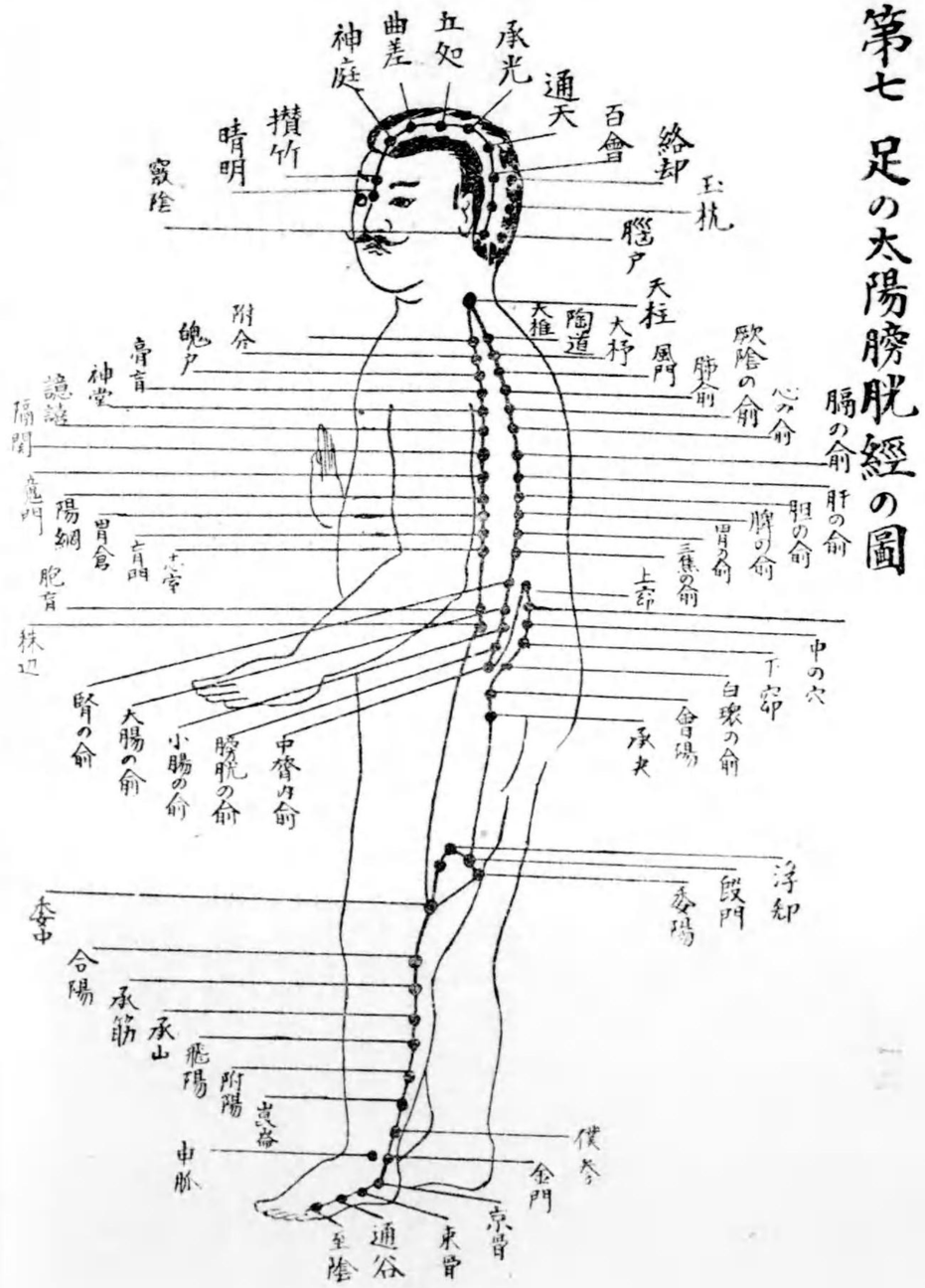
少澤　前谷　後谿　腕骨　陽谷　養老　支正　少海　肩貞　臑俞　天宗　乘風　曲垣　肩外　肩中　天窓　天容　顴髎　聽宮とす而て少澤は手の小指の外側の端に爪甲の角を去こと一分陷たる中に在、前谷は手の小指の外側本節の前陷たる中に在、後谿は手の小指の外側本節の後陷たる中に在、腕骨は手の外側腕前起骨の下陷たる中に在、陽谷は手の外側腕中兌骨の下陷たる中に在、養老は手の踝骨の上一空に在腕後一寸陷たる中に在、支正は腕後五寸の處に在、少海は肘の内大骨の外に在、肘端を去こと五分陷たる中に在、肩貞は肩の曲胛の下兩骨の解間肩髃の後陷たる中に在、臑俞は肩髎をさし挾む、後の大骨の下胛の上廉陷たる中に在、天宗は乘風の後大骨の下陷たる中に在乘風は天髎の外肩上の小髃の後に在、曲垣は肩の中央曲胛陷成中に在、肩外



の俞は肩胛の上廉脊を去こと三寸陷たる中に在、天窓は頸（くび）の大筋の前曲頰（みつすい）の下扶突の後動脈手に應ずる陷たる中に在、天容は耳の曲頰の後に在、顴髎（はさきのぬね）は面の頑骨の下廉兌骨の端陷たる中に在、聽宮は耳の中の珠子大さ赤小豆の如く成に在、

此系統には嗌痛、領腫回顧不能、肩拔けるが如く臑折れたるが如き痛、耳聾、目黄み、頰腫、頸領肩臑肘臂の外後廉痛む等の諸病惹き起すことあり

# 第七　足の太陽膀胱經の圖




左右各六十三穴あり曰く

晴明　攢竹　曲差　五處　承光　通天　絡却　玉枕　天柱　大杼　風門　肺俞　厥陰の俞　心の俞　肝の俞　膽の俞　脾の俞　胃の俞　腎の俞　大腸の俞　小腸の俞　膀胱の俞　中膂内俞　白環の俞　上髎　次中髎　下髎　會陽　承扶　殷門　浮郄　委陽　委中　附分　魄戸　膏肓　神堂　譩譆　膈關　魂門　陽綱　意舍　胃倉　肓門　志室　秩邊　合陽　承筋　承山　飛陽　附陽　崑崙　僕參　申脈　金門　京骨　束骨　通谷　至陰

而て晴明は目の内眥に在、攢竹は眉頭の陷たる中に在、神庭は督脈（第十三圖）の部に於て述べん、曲差は神庭の傍ら一寸五分の處に在、五處は上星の傍らをさし挾む一寸五分の處に在、承光は五處の後一寸五分の處に在、通天は承光の後一寸五分の處に在、百會は督脈（第十三圖）の部に於て述べん、絡

却は通天の後一寸五分の處に在、玉枕は絡却の後一寸五分の處に在、腦戸は督脈(第十三圖)の部に於て述べん、天柱は頸の大筋の外廉頂をさし挾む髮際陷たる中に在、大椎、陶道は督脈 第十三圖)の部に於て述べん、大杼は頂後の第一椎の下に在、風門は第二椎の下に在、肺の俞は第三椎の下に在、厥陰の俞は第四椎の下に在、心の俞は第五椎の下に在、膈の俞は第七椎の下に在肝の俞は第九椎の下に在、膽の俞は第十椎の下に在、脾の俞は第十一椎の下に在、胃の俞は第十二椎の下に在、三焦の俞は第十三椎の下に在、腎の俞は第十四椎の下に在、大腸の俞は第十六椎の下に在、小腸の俞は第十八椎の下に在、膀胱の俞は第十九椎の下に在、中膂中俞は第二十椎の下に在、白環の俞は第二十一椎の下に在、(註人の脊椎骨は二十一節あり)上髎は第一空腰踝の下一寸の處に在、次髎は第二空脊をさし挾む陷中に在、

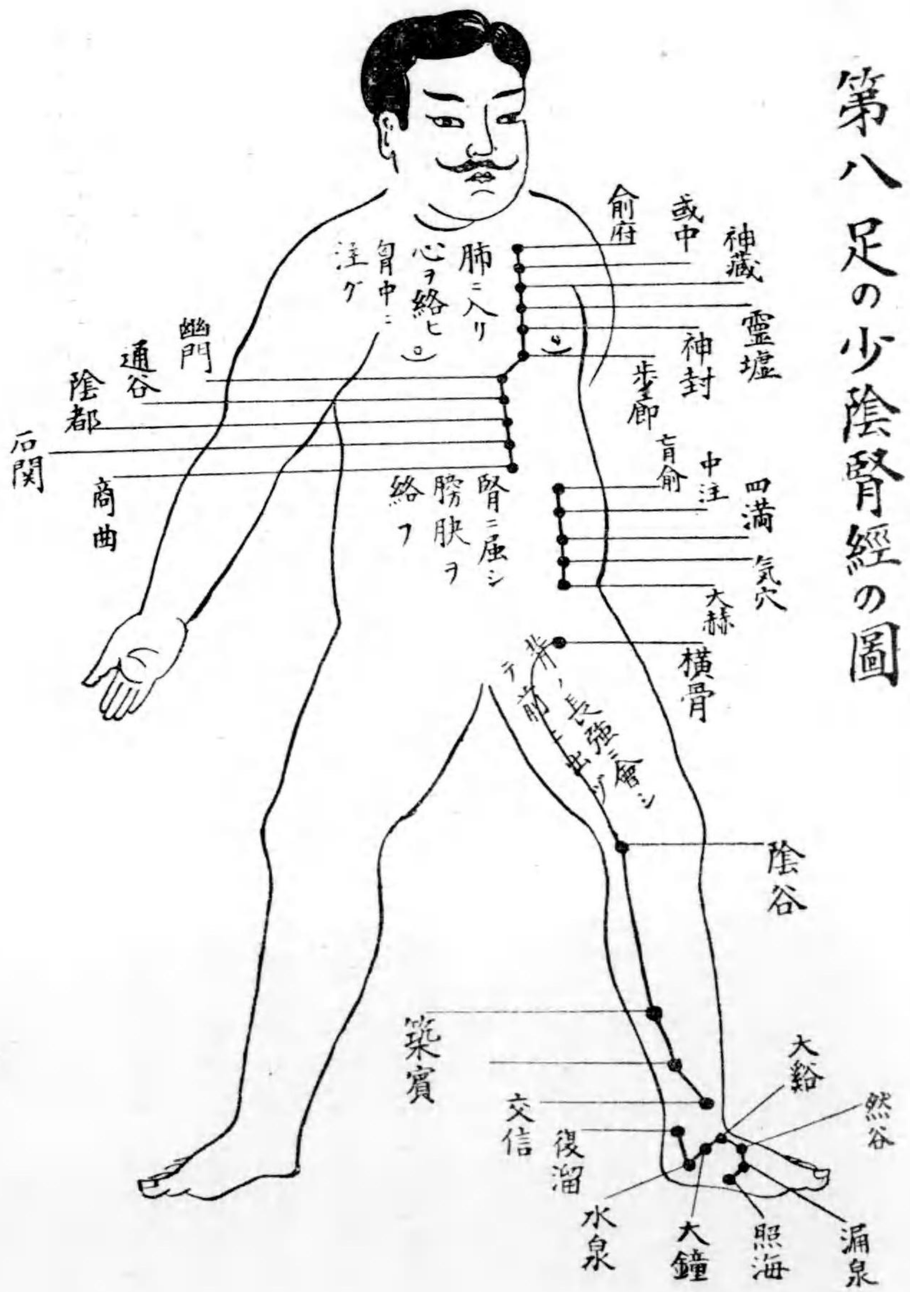


中髎は第三空脊をさし挾む陷中に在、下髎は第四空脊を挾む陷中に在、會陽は尾骶骨の兩旁に在、承扶は尻臀の下股陰の上紋中に在、殷門は肉郄の下六寸の處に在、浮郄は委陽の上一寸の處に在、委陽は承扶の下六寸の處に在、委中は膕の中央約文の中の動脈に在、附分は第二椎の下に在、魄戸は第三椎の下に在、膏肓は第四椎の下に在、神堂は第五椎の下に在、譩譆は肩髆の內康に在、第六椎の下をさし挾む、膈關は第七椎の下に在、魂門は第九椎の下に在、陽綱は第十椎の下に在、意舍は第十一椎の下に在、胃倉は第十二椎の下に在、肓門は第十三椎の下に在、志室は第十四椎の下に在、胞肓は第十九椎の下に在、秩邊は第二十椎の下に在、合陽は膝の約文の中央の下三寸の處に在、承筋は腨腸中央陷たる中に在、承山は兌腨腸の下分肉の間に在、飛陽は外踝の上七寸の處に在、跗陽は外踝の上三寸の處に在、崑崙は外踝の後跟

骨の上陷たる中に在、僕參は踵骨の下陷たる中に在、申脈は外踝の下陷たる中に在、爪甲を容白肉の際に在、金門は足の外踝の下に在、京骨は足の外側大骨の下赤白肉の際陷たる中に在、束骨は足の小指の外側本節の後陷たる中に在、通谷は足の小指外側本節の前陷たる中に在、至陰は足の小指外側に在爪甲の角を去こと韮葉の如し

此系統には頭痛、脊痛、腰痛、痔瘧、狂癲疾、頭顱頂痛、目黄み、鼻衄（はなち）、頂脊腰尻、腘腨、脚痛等の諸病惹き起すことあり

## 第八 足の少陰腎經の圖



左右各二十七穴あり曰く

涌泉　然谷　大谿　大鐘　照海　水泉　復溜　交信　築賓　陰谷　横骨　大赫　氣穴　四滿　中注　肓腧　商曲　石關　陰都　通谷　幽門　步廊　神封　靈墟　神藏　或中　腧府とす而て涌泉は足心陷たる中足を屈指を捲て宛々たる中に在、然谷は足の内踝の前、大骨の下陷たる中に在、大谿は足の内踝の後跟骨の上動脈陷たる中に在、大鐘は足跟後衝中に在、照海は足の内踝の下に在、水泉は大谿の下一寸内踝の下に在、復溜は足の内踝の上二寸動脈陷たる中に在、交信は足の内踝の上二寸少陰の前太陰の後三陰交穴は足の太陰に見たり足の三陰の交會なり、築賓は足の内踝の上腨分の中に在、陰谷は膝の内輔骨の後大筋の下小筋の上に在、横骨は大赫の下一寸肓俞の下五寸の處に在、大赫は氣穴の下一寸の處に在、氣穴は四滿の下一寸に在、四滿は中注



の下一寸氣海の旁ら一寸の處に在、中注は肓俞の下一寸に在、肓俞は商曲の下一寸臍の旁を去ること五分の處に在、商曲は石關の下一寸の處に在、石關は陰都の下一寸の處に在、陰都は通谷の下一寸の處に在、通谷は幽門の下一寸の處に在、幽門は巨闕の旁ら各五分にさし挾む、商曲より通谷に至り腹の中行を去ること各五分、步廊は神封の下一寸六分陷たる中に在、神封は靈墟の下一寸六分陷たる中に在、靈墟は神藏の下一寸六分陷たる中に在、神藏は或中の下一寸六分陷たる中に在、或中は俞府の下一寸六分陷たる中に在、俞府は巨骨の下璇璣の旁ら二寸陷たる中に在、步廊より或中に至て胸の中行を去ること各二寸足の陽明の經に見たり

此る系統には口熱、舌乾、咽腫、上氣、嗌乾、煩心、心痛、黄疸、腸癖、脊臂股内の後廉痛等の病を惹き起すことあり

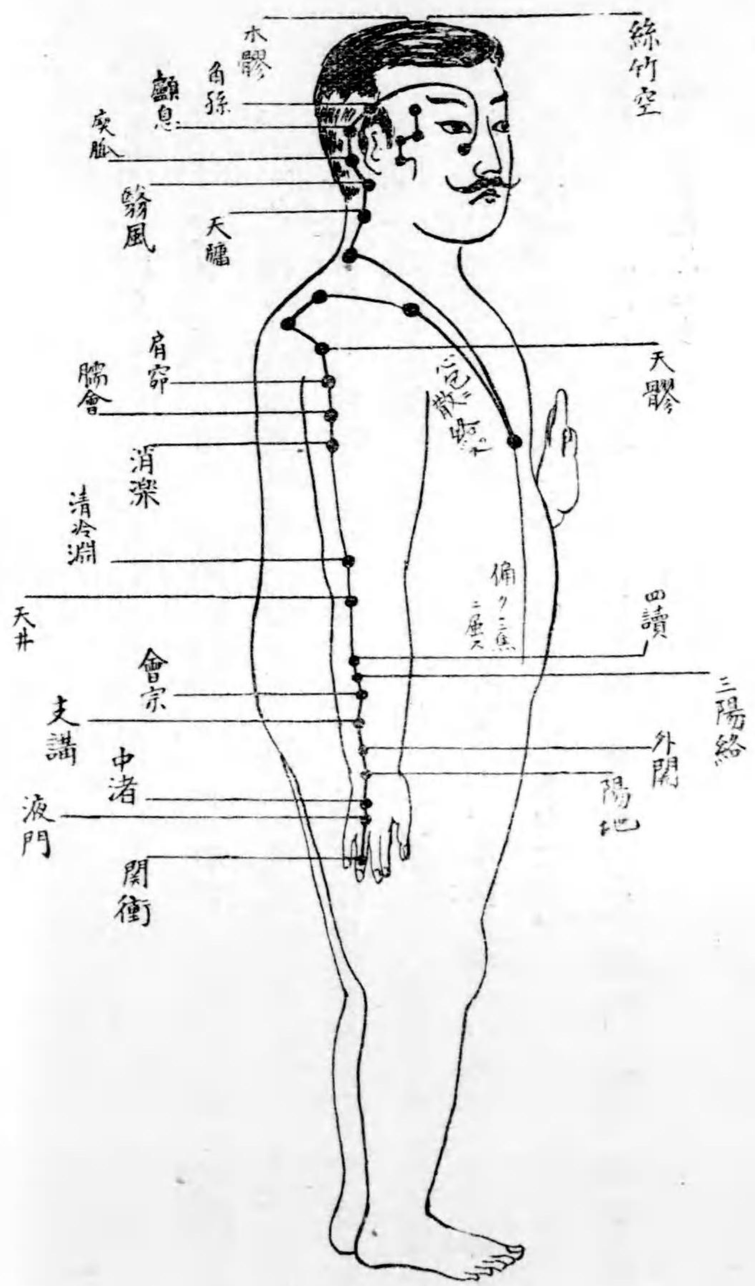
# 第九　手の厥陰心包經の圖

左右各九穴あり曰く

天池　天泉　曲澤　郄門　間使　內關　大陵　勞宮　中衝とす而て天池は腋下三寸乳後一寸脇小著直腋橛助間に在、天泉は曲腋の下臂を去ること二寸の處に在、曲澤は肘の內廉の下陷たる中に在、郄門は掌の後腕を去ること五寸の處に在、間使は掌の後三寸兩筋の間陷中に在、內關は掌の後腕を去ること二寸の處に在、大陵は掌の後兩筋の間陷たる中に在、勞宮は掌の中央に在、中衝は手の中指の端爪甲を去ること韭葉の如く陷たる中に在、

此系統には手心熱、臂肘攣、急腋腫、胸脇支滿、目黃み、煩心、心痛、掌中熱等を惹き起すことあり

# 第十　手の少陽三焦經の圖



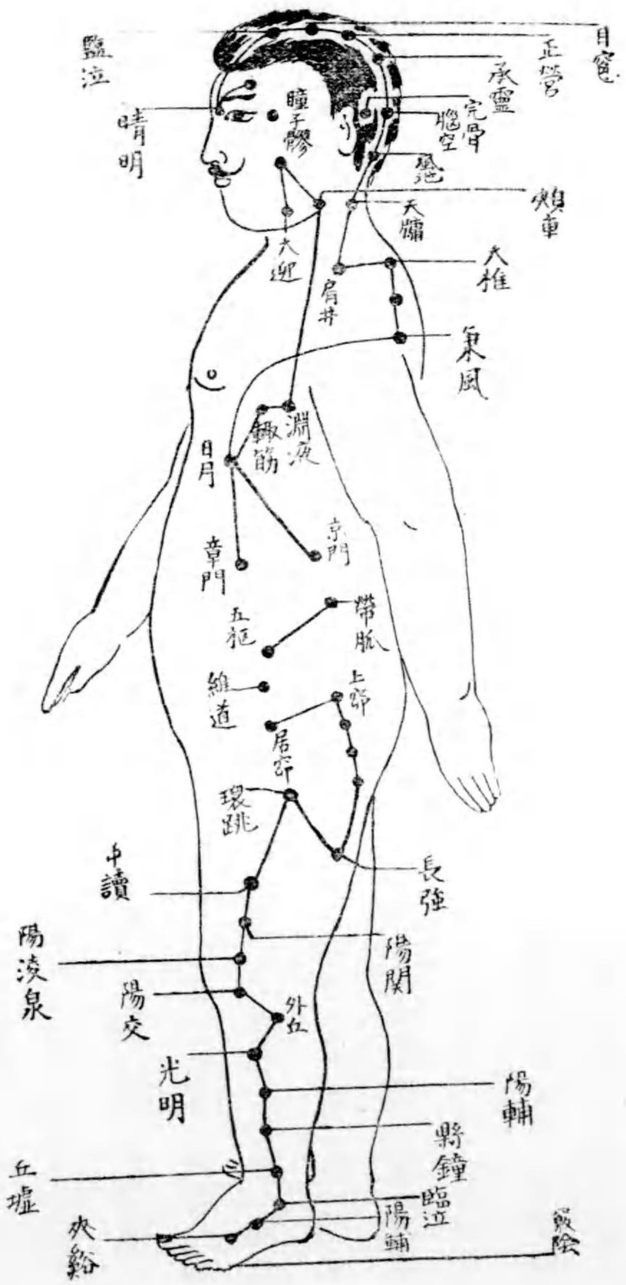

左右各二十三穴あり曰く

關衝　液門　中渚　陽池　外關　支溝　會宗　三陽　四瀆　天井　清冷淵　消濼　臑會　肩髃　天髎　翳風　瘂脈　顱息　角孫　耳門　禾髎　絲竹空と す而て關衝は手の小指の端に在、爪甲を去こと韮葉の如し、液門は手の小指の次指の間陷たる中に在、中渚は手の小指の次指の本節の後の間陷たる中に在、陽池は手の表腕の上陷たる中に在、外關は腕後二寸陷中に在、別て手の心主に走る、支溝は腕後三寸兩骨の間陷たる中に在、會宗は腕後三寸空中一寸の處に在、三陽絡は臂の上大交脈支溝の上一寸の處に在、四瀆は肘の前五寸外廉陷たる中に在、天井は肘の外大骨の後上一寸兩筋の間陷たる中に在、清冷淵は肘の上二寸の處に在、消濼は肩の下臂の外間の腋より肘分より斜に下行するにあり、臑會は肩の前廉肩頭を去こと三寸の處に在、肩髃

は肩の湍臑の上に在、天髎は肩の缺盆の中上必骨の際陷中に在、天牖は頸の大筋の外缺盆の上天窓の後に在、翳風は耳後の尖角陷中に在、瘈脈は耳本の後雞足青脈の中に在、顱息は耳後青脈の中に在、角孫は耳郭中間の上に在、耳門は耳前の起肉耳に當て缺たる中に在、禾髎は耳前兌髮の下横動脈に在、絲竹空は眉の後陷たる中に在。

此系統には耳聾、喉腫、喉痺、汗出目の鋭眥痛、頰痛、耳後肩臑肘臂の外皆痛む諸病を惹き起すことあり

# 第十一 足の少陽膽經の圖



左右各四十三穴あり曰く

瞳子膠　聽會　客主　頷厭　懸顱　懸釐　曲鬢　率谷　天衝　浮白　竅陰

完骨　本神　陽白　臨泣　目窓　正營　承靈　腦空　風池　肩井　淵液　輙

筋　日月　京門　帶脈　五樞　維道　居髎　環跳　中瀆　陽關　陽陵　陽交

外丘　光明　陽輔　懸鐘　丘墟　臨泣　地五　俠谿　竅陰とす而て瞳子髎は

目の外眥五分の處に在、聽會は耳前陷たる中に上關の下一寸動脈の宛々たる

中に在、客主は耳前起骨の上廉口を開ば空あり動脈宛々たる中に在、頷厭は

曲周の下顴顬（一には腦空と名づく）の上廉に在、懸顱は曲周の上顴顬の中に在、懸釐は

曲周の上顴顬の下廉に在、曲鬢は耳上の髮際曲隅陷たる中に在、率谷は耳上

如前三分髮際に入ること一寸五分陷たる者宛々たる中に在、天衝は耳後の

髮際二寸耳上如前三分の處に在、浮白は耳後の髮際に入ること一寸の處に在



竅陰は完骨の上枕骨の下搖動して空あるに在、完骨は耳後の髮際に入ること

四分の處に在、角孫は手の少陽經（第十圖）に見たり手足少陽の會なり、本神

は曲差の旁一寸五分髮際に入ること四分の處に在、曲差は足の太陽經（第七

圖）に見たり、陽白は眉上一寸直瞳子に在、晴明は足の太陽經（第七圖）に見

たり手足の太陽少陽足の陽明五脈の會臨泣目上直に髮際に入五寸陷たる中に

在、目窓は臨泣の後一寸の處に在、正營は目窓の後一寸の處に在、承靈は正

營の後一寸五分の處に在、腦空は承靈の後一寸五分の處に在、玉枕は骨の下

陷たる中にさし挾む、風池は顴顬の後髮際陷たる中に在、天牖は手の少陽經

（第十圖）に見たり、肩井は肩上の陷たる中缺盆の上大骨の前一寸半に在、三

指を以て按して之を取中指の中陷たる中に當る者是なり、大椎は督脈（第十

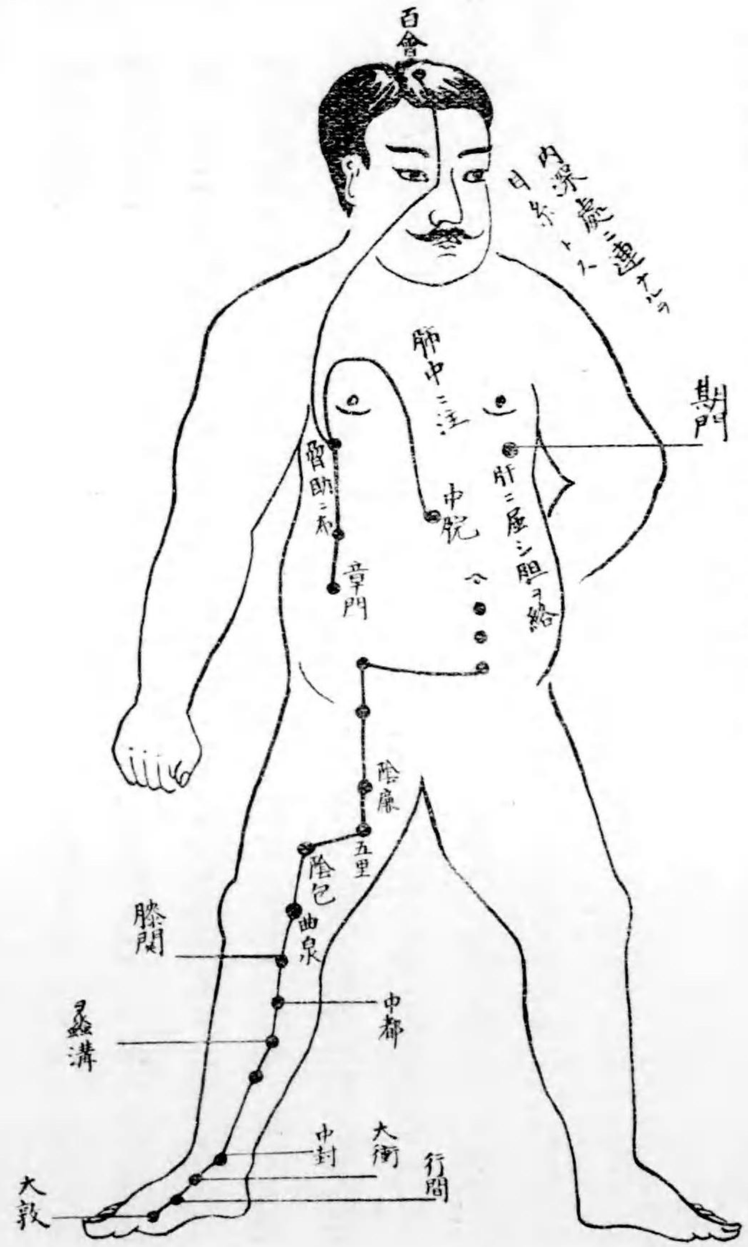
三圖）に見たり、翳風は手の少陽經（第十圖）に見たり、大迎は足の陽明經

（第三圖）に見たり、顴髎頰車は手の太陽の穴、天池は手の心主の穴手の厥陰足の少陽の會、期門は足の厥陰の穴、日月は下文に見たり膽の幕なり

章門は足の厥陰の穴足の少陽厥陰の會、氣衝は足の陽明の穴、環跳は髀樞の中に在、淵腋は腋下三寸宛々たる中に在、輙筋は腋下三寸復前に行こと一寸脇に著陷たる中に在、日月は期門の下五分の處に在、京門は監骨の下腰中脊を挾む季助の本に在、帶脈は季助の下一寸八分の處に在、五樞は帶脈の下三寸の處に在、維通は章門の下五寸三分に在、居髎は章門の下八寸三分監骨の上陷たる中に在、上髎中髎は足の太陽經（第七圖）に見たり、長強は督脈（第十三圖）に見たり、中瀆は髎骨の外膝の上五寸分肉の間陷たる中に在、陽關は陽陵泉の上三寸犢鼻の外陷たる中に在、陽陵泉は膝下一寸外廉陷たる中に在、陽交は足の外踝の上七寸に在斜に三陽分肉の屈す、外丘は足の外踝の上七寸に在、光明は足の外踝の上五寸に在、陽輔は足の外踝の上四寸輔骨の前絶骨の端に在、前の如く三分丘墟を去こと七寸、懸鐘は足の外踝の上三寸輔骨脈の中に在、丘墟は足の外踝の下に在、前の如く臨泣を去こと三寸、臨泣は足の小指次指の本節の後の間陷たる中に在、俠谿を去こと一寸半、地の五會は足の小指の次指の本節後陷中在、俠谿は足の小指次指の岐骨の門本節の前陷中に在、竅陰は足の小指の次指の端に在、爪甲を去こと韮葉の如し

此系統には頭角、頷痛、目銳眥痛、缺盆、中腫痛、腋下腫、馬刀瘻を挾、汗出、振寒、瘧胸助、髀膝外脛絶骨外踝諸節痛む諸病を惹き起すことあり

# 第十二　足の厥陰肝經の圖



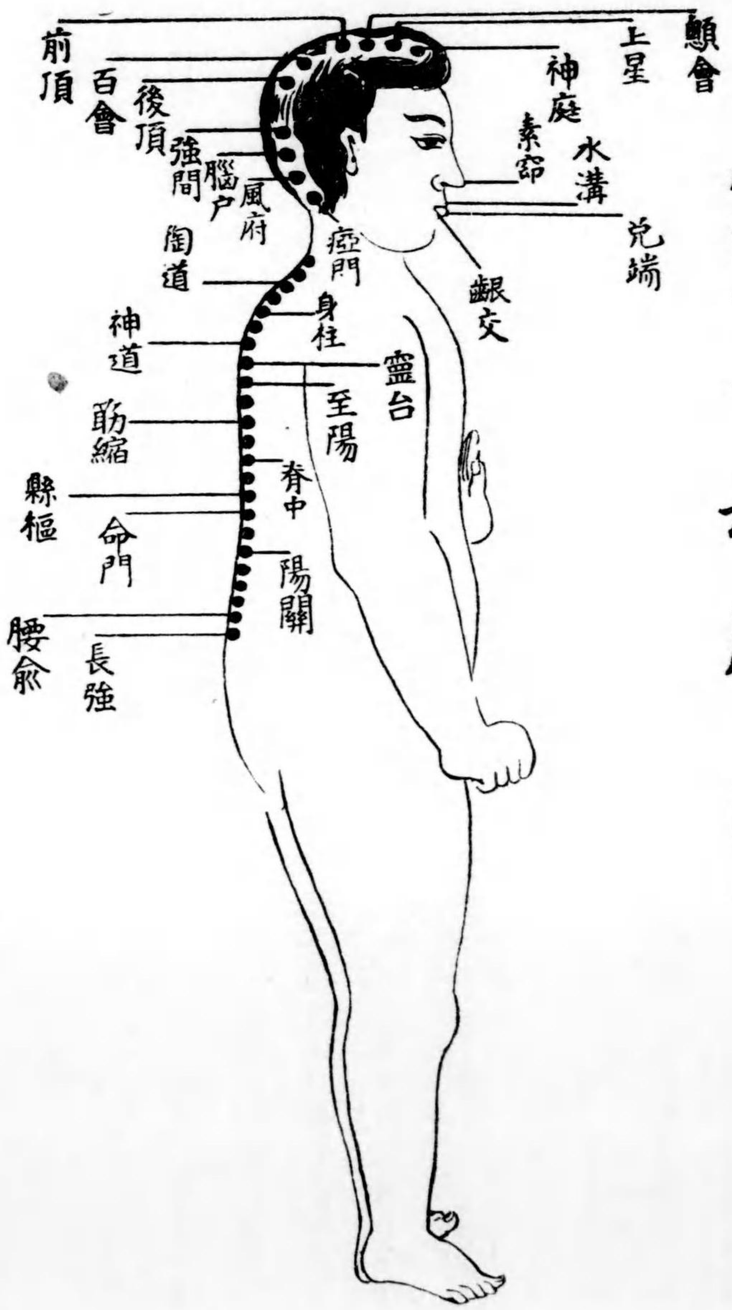

左右各十三穴あり曰く

太敦　行間　太衝　中封　蠡溝　中都　膝關　曲泉　陰包　五里　陰廉　章門　期門と為す而て太敦は足の大指の端爪中を去こと韭葉の如し及三毛の中に在、行間は足の大指の間に在、動脈手に應ず、大衝は足の大指の本節の後二寸に在、或は一寸半動脈陷中と云、中封は足の内踝前一寸陷成中在、蠡溝は内踝の上五寸の處に在、中都は内踝の上七寸胻骨の中に在、膝關は膕鼻の下二寸陷たる中に在、曲泉は膝の内輔骨の下大筋の上小筋の下陷たる中に在、膝を屈之を得る膝の横文頭に在是なり、陰包は膝上四寸股の内廉兩筋の間に在、五里は氣衝の下三寸陰股の中動脈に在、陰廉は羊矢の下氣衝を去こと二寸動脈の中に在、章門は大横の外直臍季肋の端に在側臥して上足を屈し下足を伸臂を擧之を取、期門は直に兩乳第二助の端肝の慕なり

此系統には腰痛、癪疝（男子）、小腹腫（婦人）、胸滿嘔逆、洞洩狐疝、違溺經閉等の患を惹き起すことあり



# 第十三　督脈の圖



左右各二十七穴あり曰く

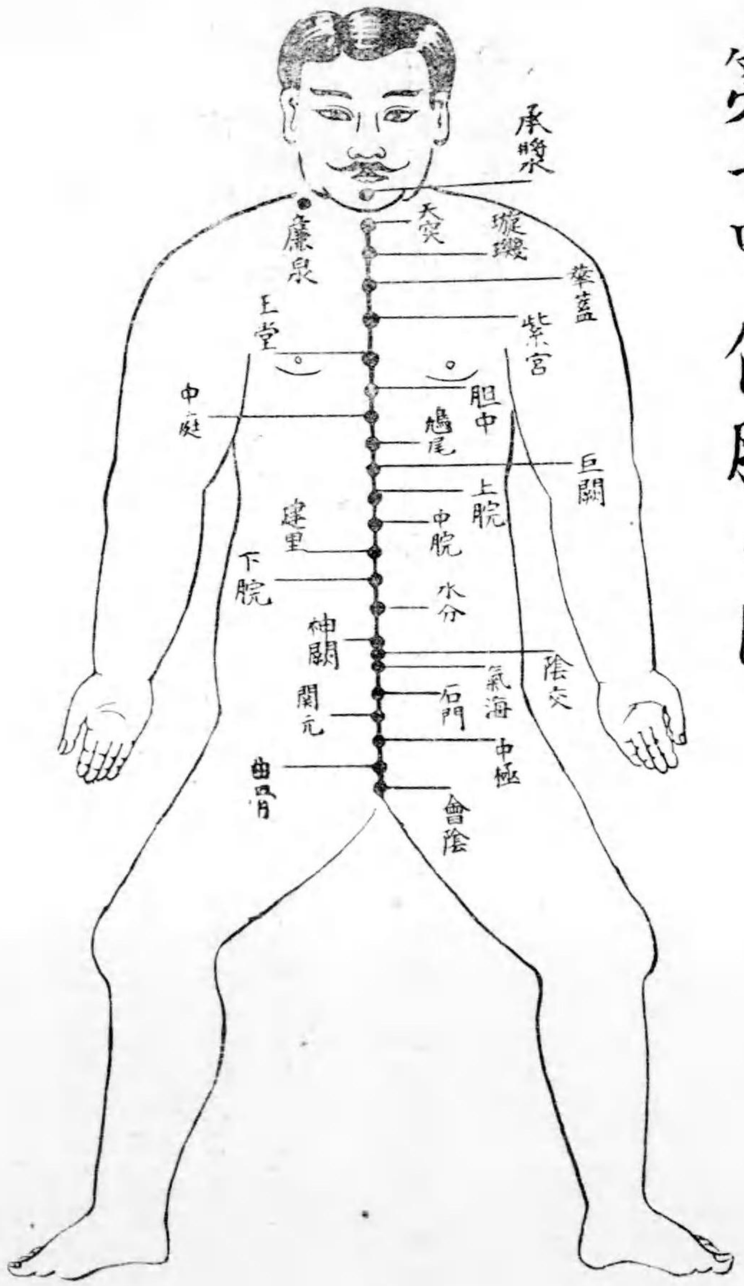
長強　腰俞　陽關　命門　懸樞　脊中　筋縮　至陽　靈臺　神道　身柱　陶道　大椎の俞　瘂門　風府　腦戸　強間　後項　百會　前項　顖會　上星　神庭　素髎　水溝　兌端　齦交とす而て長強は脊骶の端に在、腰俞は第二十一椎節下の間に在、陽關は第十六推節下の間に在、命門は第十四推節下の間に在、懸樞は第十三推節下の間に在、脊中は第十一推節下の間に在、筋縮は第九推節下の間に在、至陽は第七推節下の間に在、靈臺は第六椎節下の間に在、神道は節五推節下の間に在、身柱は第三の推節下の間に在、陶道は大推節下の間陷中に在、大椎は第一推の上推たる中に在、瘂門は風府の後髮際に入こと五分の處に在、風府は項の髮際に入こと一寸の處に在、腦戸は枕骨の上強間の後一寸五分の處に在、後項は百會の後一寸五分の處に在、百會は（一名三陽



五會）前項の後の一寸五分項の中央施毛の中直兩耳の尖豆を客可に在、前項は顖會の後一寸五分陷たる中に在、顖會は上星の後一寸陷たる中に在、上星は神庭の後髮際に入一寸陷たる中豆を客に在、神庭は直鼻の髮際に入こと五分素髎鼻柱の上端に在、水溝は鼻陷の下人中に在、兌端は脣の上端に在、齦交は脣内の齒上齦縫の中に在、

此の系統には女子は孕不、癃痔、遺溺、嗌乾、男子は纍間痛、脊强虛、頭痛の諸患を惹き起すことあり

# 第十四　任脈の圖




左右各二十四穴あり曰く

會陰　曲骨　中極　關元　石門　氣海　陰交　神闕　水分　下脘　建里　中脘　上脘　巨闕　鳩尾　中庭　膻中　玉堂　紫宮　華蓋　璇璣　天突　廉泉　承將とす而て會陰（一名屏翳）は兩陰の間に在、曲骨は横骨の上毛際（まへのけのはし）陷たる中動脈手に應ずる處に在、中極は關元の下一寸の處に在、關元は臍下（そのした）三寸の處に在、石門は臍下二寸の處に在、氣海は臍下一寸五分の處に在、陰交は臍下一寸の處に在、神闕は臍の中に當る、水分は下脘の下一寸臍の上一寸の處に在、下脘は建里の下一寸の處に在、建里は中脘の下一寸の處に在、中脘は上脘の下一寸の處に在、上脘は巨闕の下一寸（人に大小あり亦身寸を以て拘るべからず但闊狭より臍中に至八寸を以て度とす）或は一寸五分に當る即ち蔽骨（みぞおちぼね）（鳩尾骨）を去ること三寸の處とす、巨闕は鳩尾の下一寸の處に在、鳩尾は

蔽骨の端に在(所謂其骨垂下鳩の形の如し故に以て名あり)、膻の前蔽骨の下五分なり人蔽骨なきものは岐骨の際より下行一寸の處とす、中庭は膻中の下一寸六分の處に在、膻中は玉堂の下一寸六分兩乳の間に在、玉堂は紫宮の下一寸六分の處に在、紫宮は華蓋の下一寸六分の處に在、華蓋は璇璣の下二寸の處に在(資生經には一寸とせり)、璇璣は天突下の一寸陷たる中に在、天突は頸の結喉の下一寸宛々たる中に在、廉泉は頷の下結喉の上舌本に在、承漿は脣下陷たる中に在、

此系統には肌肉熱、月經下、七疝結(男子)、帶下、瘕聚、胞中痛(婦人)等を惹き起すことあり

註(十四經に於ける灸穴は皆各々左右にあれども煩雜を避る爲め一方のみを圖示せり)

以上は十四經經絡と穴所(灸點)を略述したるものなり此外奇經八脈と稱し

一、督脈
二、任脈
三、陽蹻脈
四、陰蹻脈
五、衝脈
六、陽維脈
七、陰維脈
八、帶脈

と稱する奇經經絡あれども講義錄發行の際詳述する事として爰處には贅せず

(終り)

大正十一年九月十日印刷
大正十一年九月十五日發行

著者　成見白煙
　　上原八重子

發行者　東京府下代々木新町五八番地
　　上原太藏

印刷人　東京市京橋區本材木町三ノ二五
　　間宮源次郎

印刷所　東京市京橋區本材木町三ノ二五
　　間宮印刷所

定價金壹圓

著作權所有

發行所　東京府下代々木新町五八番地
振替口座東京三二一七二〇番
長壽堂書院

2.96
497

終